



会長挨拶

岸 道 三

O. R. が最も発達するのは、おそらく日本であろう、といわれているそうです。純粋数学は世界の水準を抜いているほどで、もともと O. R. を活用することのできる優れた民族的資質をもっている一方、国内には資源が少く、経済の発展は、専ら経営に期待されるところが大きい日本こそ、とアメリカなどでは大いに関心と期待を示しているといえます。しかし、実際は、これに応えているかどうかとなると内心忸怩たるものがあります。これはお互い、みなそうなのではないかと思われます。

たしかに、文献活動は、O. R. 発生の国、英国を凌いでアメリカに次いで第二位といわれ、会員は年々ふえて 700 人を超えておりますが、それが企業のなかでどれだけ重視され、活用されているか、われわれの意図はまだ十分達せられていないように思われます。

根本は、O. R. 学会の充実、そして会長の責任にあることを反省しております。昨年、IFORS の一員として、学会が国際的に認められたのは全く理事の方々の努力なのであります。今回、再び会長に選ばれたのは、おそらく忙しさにこと寄せて会長としての責務を果さなかった昨年の罪ほろぼしの意味があるのではないかと考えております。

O. R. の学問的研究は会員の方々の研鑽に俟ち、会長の仕事は、O. R. 学会の法人化、会員の拡大、学会として恥かしくない活動のできる経常費の確保、この三つだけは今年度中に達成し、学会が自由に活動できるようにすることにあると思っております。

今年は、たまたま O. R. の先駆者 Philip M. Morse 氏をはじめ外国の O. R. の研究者も次次に来日することになっております。まさに O. R. 学会発展の機会であります。会員相互の研究、啓発をより高め、学会の意義と役割を拡め、経営の刷新、産業の発展を呼びかけてゆきたいと考えるものであります。